ひかげの花

永井荷風著

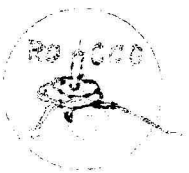
永井荷風著

ひかげの花

六興出版社

荷風小說傑作集
貳

昭和二十五年七月二十日印刷
昭和二十五年七月二十五日發行



荷風小說傑作集　二

ひかげの花

定價貳百五拾圓

著者　永井荷風
發行者　吉川晋
印刷者　守安巖
印刷所　東京印刷株式會社
發行所　株式會社　六興出版社
東京都中央區日本橋蠣殼町一ノ一二
電話茅場町(66)二一六一—六四番

手塚製本所

目次

ひかげの花　一
夏すがた　一〇九
夜の車　一四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

妾宅　一五九
おかめ笹　一九一
歡樂　三八七

ひかげの花

一

二人の借りてゐる二階の硝子窓の外はこの家の物干場になつてゐる。その日もやがて正午ちかくであらう。どこからともなく鰯を燒く匂がして物干の上にはさつきから同じ二階の表座敷を借りてゐる女が寐衣の裾をかゝげて頻に物を干してゐる影が磨硝子の面に動いてゐる。

「ちよいと、今日は晦日だつたわね。後であんた郵便局まで行つてきてくれない。」とまだ夜具の中で新聞を見てゐる男の方を見返つたのは年のころ三十も大分越したと見える女で、細帶もしめず洗ひざらしの浴衣の前も引きはだけたまゝ、鏡臺の前に立膝して寐亂れた髪を束ねてゐる。

「うむ行つて來よう。火種はあるか。この二三日大分寒くなつて來たな。」と男はまだ寐たまま起きようともしない。

「今年も來月一月だもの。」と女は片手に髪を押へ、片手に陶器の丸火鉢を引寄せる。其上に

はアルミの藥鑵がかけてある。
「うむ。月日のたつのは全く早いな。來年はおれもいよ〳〵厄年だぜ。」
「さう。全く憂鬱になるわよ。男は四十からが盛りだからいゝけれど、女はもう上つたりだわ。」と何のはずみだか肩を張つて大きな息をしたのが、どうやら男には溜息をついたやうに思はれた。
「誰だつて毎年年はとるにきまつてゐるからな。」と男は俄に申譯らしく、「まアいゝやな、かうして暮らして行けれア何も愚痴を言ふ事はない。別に大した望みがあるぢやなし……なアお千代、おれは全くかうして暮らして居られゝば結構だと思つてゐるんだ。
「それはさうよ。だけどかうして暮らして行けるのも永いことはないわよ。もう……。」
「もう。どうして。」
「どうしてッて。わたしとあんたとはいくらも年がちがはないんだもの。わたしの方ぢや稼ぐつもりでもお客の方が……。」と言ひながら女は物干臺の人影に心づいて急に聲をひそめる。
男は夜具から這出して、
「さうなれば、おれも男だ。お前にばかり寄ッかゝつてゐやしない。お前はおれの事を意氣地

なしだ――それアあんまり意氣地のある方でもないから何と思はれても仕樣がないが、おれだつて行末の事を考へずにかうしてぶら〳〵してゐるんぢやない。年を取つてから先の事はいつでも考へてゐる。だから、お前の稼ぎは今までだつて一厘一錢だつて無駄遣ひをした事はないだらう。それアお前もよく知つてゐる筈だ。なアお千代。」

囁くやうな小聲ながらも一語一語念を押すやうに力を入れ、ぴつたり後から寄添つていつか手をも握りながら、「お前、もうおれがいやになつたのか。」

「そんな事……だしぬけに何を言ふのさ。」とびつくりした調子で女は握り合つた男の手をそのまゝ、乳房の上に押當てた。

裏口の引戸をあける音と共に物干臺に出てゐた女がどしんと板の間へ降りる物音。つゞいて正午のサイレンが鳴り出す。女は思直したやうに坐り直つて、

「もうそんな話、よしませう。ねえ、あんた。ぢやア後で郵便局へ行つて來て下さいねえ。」

「うむ。ぢやア今の中……飯を食ふ前に一寸行つて來よう。」

男は立上つて羽織も一ツに重ねたまゝ壁に引掛けてある擬銘仙の綿入を着かけた時、階下から男の聲で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「中島さん。電話。」

「はい。お世話さま。」と返事をしたが、細帶もしめぬ寢衣姿に女の立ちかねる樣子を見て、男は襖に手をかけながら、

「おれが出てもいゝか。」

「いゝわ。懇意な家へは弟がゐると云つてあるんだから。」

降りて行つた男は、すぐさま立戻つて來て、「芳澤旅館だとさ。急いで下さいとさ。」

「さう。」と女は落ちてゐる男の細帶を取つて締め、鏡臺の上の石鹼とタオルとを持つて階下へ降りて行くと、男は床の間に据ゑた茶棚からアルミの小鍋を出し、廊下に置いてある牛乳壜を取つてわかし始めた。夜晝ともに電話がかゝつて來て、飯を食ふ暇のない時には女は牛乳か鷄卵で腹をこしらへて出掛けることにしてゐるのである。牛乳がわきかけた時、女は髪を直した上に襟白粉までつけ、鼻唄を唱ひながら上つて來て鏡臺の前に坐り、

「あんた。おあがんなさい、昨夜おそく食べたから、あたし何にもいらない。」

「さうか、お前の身體は全く不思議だな。よく食べずに居られるよ。」

「わたし子供の時から三度滿足に御飯をたべた事は滅多にないわ。その癖お酒も好きぢやなし

お汁粉はいやだし……經濟でいゝぢやないの。」

「全くだ。煙草ものまないし……」と言つたまゝ、男は鏡に映る女の顏が化粧する手先の動くにつれて、忽ち別の人のやうに若くなるのを眺めてゐた。眼の緣の小皺と雀斑とが白粉で塗りつぶされ、血色のよくない脣が紅で色どられると、くゝり顎の圓顏は、眼がぱつちりしてゐるので、一層晴れやかに見えて來るばかりか、どうやら洋裝をさせても似合ひさうなモダーンらしい顏立にも見られる。それに加へて肉付のしまつた小づくりの身體は背後から見ると、撫肩のしなやかに、胴がくびれてゐるだけ腰の下から立膝した腿のあたりの肉付が一層目に立つて年增盛りの女の重くるしい誘惑を感じさせる。男はお千代が今年三十六になつて猶此のやうな強い魅惑を持つてゐるのを確めると、まだこの先四五年稼いで行けない事はないと、何となく心丈夫な氣もする。それと共に人間もかうまで卑劣になつたらもうお仕舞ひだと、日頃は閑卻してゐる慚愧と絕望の念が動き初めるにつれて、自分は一體どうしてこゝまで墮落する事ができたものかと、我ながら不思議な心持にもなつて來る。自分の事のみならずお千代の心境も亦同じやうに不思議に思はれて、はつきり理解することが出來なくなる。——お千代はどういふ心持で此の年月自分のやうな不甲斐ない男と一緒に暮して來たのであらう。彼女自身も氣のつ

かぬ中いつからと云ふ事もなく私娼の生活に馴らされて耻づべき事をも耻とは思はぬやうになつたものであらう。折々は反省して他の職業に轉じようと思ふ事もあるにちがひない。然しもと〳〵小學校を出ただけの學歴では事務員や店員のやうな就職口さへなか〳〵見當らず、よし又見當つたところで、一度祕密の商賣を知つた身には安い給料がいかにも馬鹿らしく思はれ、世間は廣くても其身に適する職業は、矢張馴れた賤業の外には無いやうな心になるのであらう。それにつれて、女の身の何かにつけて心細い氣のする時、いかに不甲斐なくとも、誰か一人亭主と定めた男を持ち、生活の伴侶にして置きたいと云ふ心持にもなるのであらう——まずこんな樣に解釋するより外に其道がない。

牛乳の煮立つのに心づき男は小鍋を卸してコップにうつすと、女は丁度化粧を終り紫地に飛模樣の一枚小袖に着換へて縫のある名古屋帶をしめ、梔子色の綾織金紗の羽織を襲ねて白い肩掛に眞赤なハンドバックを持ち、もう一度顏を直すつもりで鏡の前に坐つた。

二

お千代の出て行つた後、重吉は飲み殘りの牛乳と半熟の雞卵に朝晝を兼ねた食事をすませ窓をあけて夜具を疊んでゐると、表二階を借りてゐる伊東さんといふカフェーの女給が襟垢と白粉とでべた〳〵になつた素袷の寢衣に羽織を引かけ、廊下から内を覗いて、

「中島さん……。あら、奥さんはもうお出掛けなの。」

「何か御用。」と中島は窓へ腰をかける。

「先程はすみません。おやすみのところを……。」と出入口の襖に身をよせ掛け、一封筒の上書をかいて下さいな。すみませんけれど、男の手でないといけないんだから。」

「はい〳〵御安い御用……。彼氏のところですか。」

「うゝむ。」と子供のやうに首を振り、「パトロンの家よ。來月は十二月でせう。今から攻め掛けてやらないと間に合はないから。強請るのも容易ぢやないわよ。」

「何になつても苦勞が入るもんですね。」

「女給生活、つく〳〵いやだわ。」と女は懷中から封筒を出して中島に渡し宛名番地を書いて貰ひながら、「中島さん。わたしも奥さんにお願ひして派出婦會に這入りたいわ。ねえ、中島さん。わたしに出來るか知ら。奥さんのやつてゐる接待婦ッていふのは普通の派出婦見たやうに御飯焚をしないでもいゝんだわね。」

中島はお千代の事についてはあまり深く問はれたくないので、唯領付きながら四五枚の封筒に同じ名宛を書きつゞけてゐる。お千代は以前から男と相談して怪しげな其身の上を隱さうがために、或派出婦會の接待婦になつてゐて、電話で呼ばれる時は何處へでも會の名義で出張するのだと云ひ拵へてゐる。時たま泊つて來る時には遠い別莊の宴會か何かへ雇はれた事にするのである。

中島は封筒を伊東さんに渡して、「接待婦なんて、あれア體のいゝ日雇の女中です。內のやつは年さへ若ければ女給さんになりたいッて、いつでも伊東さんの事を羨しがつてゐるんですよ。」

「ぢやア何になつてもさう面白いことはないのね。どうもお世話さまでした。」

ーオ祝は後から頂戴に行きますよ。」

「いらツしやいよ。ドーナツがあるわ。お茶を入れるから。」

女が立去ると、間もなく中島は郵便局の通帳を懐中にして階下へ降りた。階下は小賣商店の立續いた芝櫻川町の裏通に面して、間口三間ほど明放ちにした硝子店で、家の半分は板硝子を置いた土間になつてゐる。口髭を生した五十年配の主人に出ツ齒の女房、小僧代りに働いてゐる十四五の男の子の三人暮らし。梯子段の下の六疊で、丁度晝飯の茶ぶ臺を圍んでゐる處を、中島は御免なさいと言ひながら通りぬけて、臺處の側の出入口から路地づたひに、軈て表の通を電車のある方へと歩いて行つた。お千代が貯金をしてゐる郵便局は麻布六本木の阪下に在る谷町の局である。それはこの春櫻川町へ引移るまで一年あまり、其近くの横町に間借をしてゐたことがあつたからで。ところが或日お千代が筋向の格子戸造りの貸家に引越して來た主人らしい男と、横町を隔てゝ兩方の二階から顏を見合せると、その男には既に二三回、お千代は池の端の待合で出會つたことがあるといふので、若し近處のものにでも祕密の身の上をしやべられでもしたらと、萬一の事を心配して、早速現在の貸間を捜して引移つたわけである。貯金した郵便局も其中に近い處へ替へようと思ひながら、これはつひ其儘になつて居る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.